

2018. 10. 16 (火)

社会学がもつ、討議とシステムという 二つの世界観について

高原 基 彰

啓蒙主義とその行き詰まり

「よりよい社会」というのがあるとしたら、それは何でしょう。元々これは何から始まっているかという、たぶん世界史的にいうと、啓蒙主義というものから始まっています。啓蒙というのは、蒙（もう）を啓（ひらく）。愚かな人に教えをする。少し上から目線といいますか、要するにそういうことですね。

「よりよき社会」というのを、みんなで考えましょと。みんなで考えるからには、きちんとした人間でなければ駄目で、きちんと教育を受けていなければならない。それが啓蒙という意味の一つだと思いますが、それがひとしきり行きわたった。その後で、結局何が生まれたかという、残念ながら、人間はそんなに強くなって、先々のことや自分のことについて確信を持って考えられる人というのは、実はそんなに多くない。

そうするとどうなるかという、ある種、威勢のいいことを言う人、威勢のいいことを言うリーダーに人が付いていきたくなる。自分で決めないで強いメッセージを発する人に付いていけばいいという人が、実はとてもたくさんいて、むしろそちらのほうがはるかに多いという現象が起きました。

教科書的にいうと、まさにそれがナチ・ドイツを生んで、人類史上の最大の悲劇の一つを作り出していくというのが、世界史の流れです。近代の歴史のスタートでもあった啓蒙のプロジェクトというものが始まり、その後の世界はいろいろあって、残念ながら第一次・第二次大戦に至る悲劇的な過程へと結実してしまいました。

討議とシステム

ここに至って、この啓蒙のプロジェクトが一段落するということが起きます。まさに社会学での学びにも関係するのですが、その後の代表的な考えとして、「よりよき社会」というものは、おそらく二つあると。

一つは、それでもやはり人間には理性があるはずで、きちんと勉強した人がきちんと真面目に——真面目にと言うとあれですけども——話し合うことによって世界をよりよくするというのが必要だという立場です。社会学の主流はこちらなのですが、難しく言う「討議」や「熟議」と呼ばれますが、そういうものがやはり必要だという立場です。

もう一つは、人が真面目に話し合うのはもう無理なのだから、システムに任せようという考えです。人間が特に真面目に何かを考え

ようと思わなくても、人間やモノがその中を自動的に流れるシステムとしても、社会は成立するでしょうと。

こういう社会理論が、戦後の一時期に大変流行します。社会理論にすると難しいのですが、他の分野、建築などにたとえると少しわかりやすいかもしれません。建築というのは、人の流れを計算し、「ここにコンクリートでこういうものを造ると、人間はこう流れる」と。たとえば、そうすると経済が活性化するだろうと。基本的にはそういう発想です。そこに人間が、一人一人理性的な考えを持つことは想定されていません。

もう少し言うと、実はシステムという考え方は戦後になって社会学から出てきましたが、社会学は、システムという考えを結構初期に捨てました。戦後の1960年代に捨てて、システムという考え方は、むしろ社会学から経済学などのほうに導入されていって発展を遂げていきました。

これはどちらがいい、悪いという問題ではない。また、この論争が起きてからはその後、インターネットの登場によって、このシステム的な考え方というのが「現実可能」なものになったことが重要です。「アーキテクチャ」などという言い方もあったりしますが、そこでは別に人々は、真面目に、理性的に考える必要はないわけです。

二つの異なる世界観は、他にもいろいろなことを考えるとき、対照的な方向性の視点をもたらします。たとえば、現在のまちづくりなどでも、住民の人が意見を出し合い、話し合うことは重要でしょう。しかしそれだけではなくて、さびれてしまった商店街、あるいは津波で流された町などで、外部の専門家のような人が来る。一応意見は聞けけれども、

住民の人は少し置いておいて、インフラストラクチャーとして「道路をここに通して街路をこのようにすると、人がこのように回って経済は活性化する」というような発想で、まちづくりが行われたりします。こういうのがいわばシステム的な発想です。

システムの前提条件は何か

どちらの考えも分かりますし、現代はどちらかというシステム的な発想のほうがたやすいのかもしれませんが。私たちは現在、日々生活していて、「理性を持った人間同士が真面目に話し合って何かを決める」ということを、信じにくくなっているといえますか。小さな単位でいえば、例えば大学のゼミでもいいです。真面目に話し合って何か決めるといことは、できるのかな、と。

話し合ってダメなら、トップの人間が、それこそ強いリーダーとして上から命令すればうまくいくのか。これも大体うまくいかないですね。うまくいかないというのは、ファシズムのときに人類が学んだことでもあります。

そこで、「システムを作ればいいんじゃないか」という発想になる。ところが、システムをつくらと言われても難しい問題があって、システムは人間についての何かの前提が必要なんです。システムというのは、「人が自動的にこう流れるだろう」と言う予測でもある訳ですが、それを予測するからには、「人間とはこういうものだ」という前提が必要で。

最大の例が、経済学です。古典的な経済学は、「人間というのは自動的に自分の利益を最大化するように動くものだから、その人た

ちをこうやって配置すると、全体の経済量も増える」という風に考えます。「自分の経済的利益を最大化するもの」というのが、さっき言った前提ですね。

システムを構築すればいいだろうと。それこそ SNS をつくる、などというのは、こういう発想そのものな訳です。それでは、人間はどういうもので、何をしたいものかという前提を置けばよいのでしょうか。言葉を書いて人とコミュニケーションしたいと思うのか、それとも写真を見せたいと思うのか。何を交換して、何を交換したくないのか。人間の前提条件をその人なりに考えてシステムを構築する。現在の世の中には、こういう仕事が続増えています。

ここで大体、一つの袋小路に突き当たる。それは何かと言いますと、人間の前提条件を考えるというのは非常に難しいということです。俗な話はいろいろありますね。人間は性欲を一番重要に考えるはずだ、なぜなら遺伝子を残さなければいけないから、とか。あるいは、お金が一番だという説もあるでしょう。人間の本質とはこうであるという俗な話がいろいろあります。

現在起きている、様々な問題を少し考えれば想像できることですが、人間の前提はそうそう分からない、と思わされてしまうことを、われわれは日々目撃しています。お金がほしい人はたくさんいますが、あればいいのかというと、お金だけで満足するわけではない。人間は人とつながりたいはずだ。でも人とつながらなくてもいいという人も、どんどん増えています。人間は遺伝子を残すために性欲がやはり大事なのではないか。しかし、性欲がないという人がたくさん出てきている。

そうすると、システムはどうやってつくるのかという問題にぶち当たるわけです。人々は何を求めているのか。何を求めているかが分からない、何も要りませんという人たちの間で、システムは生まれません。これは抽象的な話ですが、簡単に言うと、例えばマーケティングというのは、このような問題とどうやって向き合うかを日々考える作業です。

ここで、マーケティングというのは、自分の考えたシステムがうまくいくように、人々に「どうかこういう欲望を持ってください」、「こういう欲望を持つほうが世の中よくなりますよ」というようなことを言って、止まっている人間を動かそうとするわけです。動かして、自分の設計した何かに流し込むと、お金が回り出すというような。もちろん世の中に必要なことでもありますが、劣悪な事例では詐欺師の仲間入りをしかねません。みなさんの周囲にもたくさんいると思いますので、ぜひ気をつけていただきたい。

複合的な視点

こうなると、どうも先ほどの討議、熟議というのは無理そうだな、かといって、人間の前提がどんどん分からなくなって、無理やり詐欺的に作り出さなければならないとなると、人間を動かすシステムも構築できない、両方できない、という困難さが現れてきます。

討議とシステム、社会を考える対照的な視点の持ち方として、長い間併存してきた二つが、両方ちょっと分からなくなっている。この辺りが、現在の社会科学の大きな困難としてあります。よりよい社会というのは、なかなか分かりません。よりよい社会とは何なのか、上から誰かが決めるべきでないというの

は分っています。それでは話し合って合意が取れるかという、なかなか取れない。話し合いよりもシステムを作ろうとしても、難しい。これで身動きが取れなくなってくるということが、現在実際に起きているのではないかという気がします。

ここは社会学部ですので、皆さんが卒論などで物事を考えるときにも、この二つの視点と、そのそれぞれが困難さを抱えているということ、を、ちょっと頭に入れておいていただきたい。なかでも現代の若いみなさんには、システムの考え方のほうがなじみやすい気がします。 「自分の身勝手な考えに他人を取

り込もう」というのは、実に低次元な身勝手、もしくは詐欺であって、システムの構築ではまったくありません。システムを考えるには、人間についての深く根源的な洞察が必要です。

そんな世界でどうしたらいいのか。残念ながら、簡単な解決法というのはありません。そんな世界に私よりも長く生きるのは皆さんです。社会学部はそういうことを考える学部ですので、ここでの学びを通して、「ではどうしたらいいのか」ということをとらえに考えましょう。

(社会学部准教授)